

氏 名 (本 籍)	相 馬 隆 (青 森 県)
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	博 乙 第 520 号
学位授与年月日	平成元年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	芸 術 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	安息隊商歷程考 絹の道を西へたどる
主 査	筑波大学教授 真 保 亨
副 査	筑波大学教授 P h . D . 石 田 友 雄
副 査	筑波大学教授 岩 崎 卓 也
副 査	筑波大学教授 中 山 公 男

## 論 文 の 要 旨

本論文は葱嶺 (Pamir 高原) より地中海, Syria の Antiochia までの隊商による道程即ち, 今から約2000年以前〔時あたかも安息国 (Parthia), 前漢・後漢が殷賑を極めた頃に当たる〕のシルクロード西半分が如何なる形勢事情にあったか, その全体像の解明を目的とし, 漢籍に点綴し, 秦西古典に僅少なながらも散見する所請「西域」諸国の地名・国名の考証, 及び東洋史, 考古学, 東西美術交渉史上の碩学の研究による残余にして懸案の重要事項の究明をおこなったもので, 以下の如き構成より成る。

- 第一章 白印度, Parthia 領東端 Alexandropolis より Syria の Antiochia までの道程 (全体を39節に分けるが, 節以下は省略した。)
- 第二章 所請「飛橋」Zeugma より大秦の都城, 烏遲散城 (Antiochia) 方面に至る道程
- 第三章 安息東界 Antiochia Margiana (Merv. 本鹿城) と Bactria 間の道程
- 第四章 烏弋山離道 (Arachosia Drangiana 方面) より, Carmania 砂漠を経由, ペルシア湾頭, 条支国 (Susa Susiana), 于羅国 (Spasinu Charax) 方面に至る路程
- 第五章 安息国北方路
- 第六章 阿蛮国 (Ecbatana) より, 斯賓国 (Ctesiphon) を経て, 河水によりペルシア湾頭, 于羅国 (Spasinu Charax) に至る道程
- 第七章 安息国本土より南, Elymais Persis 方面に至る行程
- 第八章 斯羅国 (Seleucia) より安谷城 (Orchoi) を経てペルシア湾頭に至る路程
- 第九章 ペルシア湾頭, 于羅国 (Spasinu Charax) より, アラブのまち Hatra を経由, 驢分城

(Edessa), Hierapolis-Bambyce 方面への道

第十章 Euphrates 河上より且蘭国 (Palmyra), 汜復国 (Damascus) 方面に至る道程

第十一章 且蘭国 (Palmyra), 汜復国 (Damascus) より海西海北諸国およびペルシア湾頭諸国への  
路程

第十二章 且蘭国 (Palmyra) と海西南道諸国の路程および、『魏略』に見える「于羅国」(Hauran)  
の位置

第十三章 積石 (Hamad), 犂靬国 (Petra) 等, いわゆる海西南道諸国の旅程と西南アラビア (全  
489頁 昭和57年10月25日刊 東京新聞社出版局)

莎車 (Yarkand) または皮山 (Guma) より Tashkurgan に至り, 懸度の陰を越えて, 罽賓 (Gandhara) に達し, 更に西して樸桃 (Kabul) に進み, 此処から南して, 西域南路の終極, 安息国統治の東端, パルティア人の「白印度」と呼称し, 漢人の烏弋山離国の疆域と見なした Arachosia の Alexandropolis に到達した東西の商賈は, これよりさき, 安息国領内の所請王道を辿る事となるのである。

Arachosia, Drangiana の項では, 所請塞族の南遷, 烏弋山離国興起の問題を説き, 罽賓, 樸桃, 大月氏との位置関係を観じ, 気候・地理・風土に加えて, 自らに依るパルティア時代の一大完好遺跡, Kun-i-Khwaja の実査の結果に就いても叙述している。

このあたりから先は、『漢書』西域伝, 烏弋山離国の条に「至烏弋山離, 南道極矣, 転北而東, 得安息」とあり, Isidorus の『パルティア駅亭誌』にも同様に見えるので, Areia の Alexandria, Antiochia Margiana (Merv, 『後漢書』西域伝の木鹿城) あたりまでは, 峻険な Paropamisus の山塊, 溪谷, 平原を点綴する北方への道となるのである。著者は, 漢使が初めて安息王と会見した安息東界, 即ち, Antiochia Margiana が東西の枢要の地であった点に就いて述べ, ついで, Isidorus に依れば, 王家の墓があるとされる『漢書』西域伝, 安息国の条に記される「番兜城」Parthaunisa (古ニサ) の都城の問題, そして Nisa の名称と大宛国, 式師城の天馬 (ニサの馬, パルティアの馬) の問題にまで, 言及している。

次に始祖 Arsaces (竜の子) の即位の地と, 不死の火とナフタ炎, そして, 恐らくは其れを使用したと思われる所請幻術の一つ, 漢代の人々の目撃したであろう吐火の術, 至福の地, Hyrcania, そして Comisene の安息の夏の都, Hecatompylos の位置の問題, Coarena の狭い谷, 燃える岩と塩水の隘路を抜ける所請 Portae Caspiae (カスピの門) の所在に就いて考証する。

ついで, Ragae (今日のテヘランの南) を通過, Media の都城 Ecbatana (漢籍の阿蛮国) を經由, Concoabar の大神祠に至る。此処では実査に基づく同遺跡と主神, Anahita 女神と Syria の Semiramis 誕生説話の有機的関係が究明される。海拔3000メートル以上の Zagros の高峻な山々の峡谷を縫い, 西南方向に向かい, Bisitun [Baghistanon Oros (神の山)] では, Darius 大王戦勝記念碑の, 紀元前後に於ける東西の旅客の呼称である「Semiramis の柱」について考証し, ついで下方 Mithradates 二世と四人の大守の図像にふれ, 漢の武帝との使節交換とその歴史的意義について論述している。

此处から先は、Media の境界、Zagri Porte（ザクロスの門）を越えて、Tigris 河右岸、Sitacene（漢籍の思陶国）を経由、東西の枢要の地、マケドニア人の創設にかかる、Seleucia（ス羅国）、そしてパルティア人の Ctesiphon（ス賓国）に至るのである。叙上の Tigris 河畔の都城より離れ、道はやがて王の河を経由して、Euphrates 河上の Neaplis 方面へと向かい、ローマ東方領、パルティアの国境（Euphrates 河は、安息とローマ東方領の国境線）に戦略上も含めて、数多に渡り点在する宿駅を Euphrates 河上に西北方し、東西の旅客の等しく通過した、路程の分岐点たる Edessa（驢分城）方面、そして、Isidorus の『パルティア駅亭誌』の出発点、安息国の税関たる Zeugma の渡津に至るのである。かくして、著者は、Isidorus の『パルティア駅亭誌』に準拠し、Arachosis（白印度）の Alexandropolis より、安息国西端の Commagene の Zeugma までの道程を仔細に復元考証したのち、東西の分岐点の Edessa（驢分城）より、海北国、即ち、Syria Proper に至る道程、そして、『魏略』の烏遲散城（白鳥庫吉博士の Antiochia 説）の問題をも、博士を支持、論証、解明している。

ついで、内陸部、ことに安息国東界、漢籍の本廐城（Merv, Antiochia Margiana）と大夏国間の道程に就いて述べ、前述の西域南路の終極、烏弋山離道には今日のイラン南西砂漠を経由して（Carmania）条支国（著者の研究に依れば、Susa, Susiana）におもむき、ペルシア湾頭の Emporium である于羅国への路程のつらなるものであった事を、藤田豊八博士、白鳥庫吉博士の論戦を機軸に、新文献資料を提出して、証明している。

また、Caucasus, Armenia 方面への所請北方路に就いても解析し、Media の首都 Ecbatana（阿蛮国）より、Tigris 河畔の、前述のス羅国（Seleucia）、ス賓国（Ctesiphon）を経由、著者の考察によるところの、ペルシア湾頭の商販の基地、于羅国（Spasinu Charax）に至る道程の存在に就いても、豊富な資料を駆使して考証している。わけても『後漢書』西域伝、安息国の条及び、『魏略』も共に同名「于羅国」の位置、形勢に就いて叙するが故、その所在は、東洋学上の難問題の一つであった。Hirth, F. 博士の Nedjef 沢北岸の Hira 説、これを否定される白鳥博士は、Euphrates 河上の Ura 説を揚げられ、『魏略』、『後漢書』共に方位、距離の問題にしても、大いなる誤謬あるものとされておられる。

著者は『後漢書』の「于羅国」は先ず、①安息西界の極りと目されていたこと、②ス賓（Ctesiphon）より南、九百六十里のあたりに存したこと（後1～3世紀の漢里が、一里、三百歩で414.75メートル、従って九百六十里は、約400キロ）、③これより南は、海に乗って大秦に通じたもので、これより以南は専ら海路によったものであること、対するに『魏略』の「于羅国」が、①氾復（Damascus）の東北あたりに存すること、②「于羅」は大秦の属領であったこと、③于羅の東北に一河のあったこと等に着目し、疆域の全く異なる二国の存在が彷彿すること、「于羅」を一国の名称とのみ解する時、叙上の二文献の記事は到底、正当に解釈されないであろうことを述べている。従って、『後漢書』の「于羅国」は、ス賓・ス羅あたりから到達が容易で、安息西界の極りに属するペルシア湾の一国、Charax (Spasinu) にひとまず比定している。

Elymais, Persis 方面に向かう安息内陸部の略程、Babylon 及び要衝安谷城（Orchoi）、Arbela、Assur、Hatra の遺跡、且蘭国（Palmyra）を中心に、氾復国方面への路程、及び且蘭国（Palmyra）

より海西海北諸国への路程を考察したのち、ついで叙上の『魏略』の「于羅国」については、大秦国（ローマ東方領）の属領であったらしいこと、汜復国（Damascus）、且蘭国（Palmyra）、賢督国（Jerusalem）あたりに、極めて近接している点、また音韻上の問題からも、汜復の東北、三百四十里、税関があり、東西の旅客の必ず通過せねばならなかった Hauran, Aueria にこれを考定している。また、紅海の表玄関とも目される「海西国」の問題についてもふれ、その見解は極めて気脈に富み、その論証は犂靬国の問題に及ぶのである。所請論文後章は、魏略に見られる海西南道諸国、上記の汜復国、于羅国、賢督国、犂靬国の道程で、ローマ東方領の路程の復元・考察とも云うことができよう。

## 審 査 の 要 旨

紀元前後における葱嶺以西の路程にかかわる文献ないしその歴史地理学的研究は、誠に僅少と云わなくてはならないであろう。また漢籍に僅かに散在する西域諸国の名称とその地理的特徴が今日の中近東の如何なる遺跡・都城に吻合すべきものであるか、東西の古典籍から、これを案出し考定し、加えて葱嶺以西の要路の全容を網羅解明するなど、決して容易なる業ではあるまい事と思われる。著者は、かくの如き難事に果敢に立ち向かい、辛うじて点綴する東西の諸文献を精査・解析し、西城南北路以西の主として安息国領内の歷程の次第、ついで、『魏略』と云うところの、海北国の疆域、更に地中海沿岸、即ち、海西南道諸国の道程まで、東亞、西亞の諸地域に跨がり、復元・考察を試みているのである。著者の精密な研究による独自の見解は、全巻を覆いつくすと云うべく、例えば地名、国名の同定についても、ひとり「于羅国」のみならず、その東北方にあたる Susa, Susiana の疆域にしても、これを論証の末、所請「条支国」に比定しているのである。

本論文は、かくの如く壮大な絹の道の復元について精綴にわたって、かつ興味深く考証したもので、未踏の分野に新説を提起した点、高く評価される。ただ、本論文完成後既に数年を経過している点、この分野に於ける最新の研究について触れる所のないことや、引用文献に必ずしも第一級のそれではないものを含むこと、表記にやや統一を欠く等の若干の問題点が指摘されよう。しかしこれらは、今後著者の研究の発展に伴って、補填されるであろうことが期待される。いずれにせよ上述の如く、本論文の斯学に於ける寄与は十分に認めることが出来よう。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。